



作文3部

全国農業協同組合中央会会長賞

じいちゃん自慢の米

栃木県宇都宮短期大学附属中学校一年

麦倉 惟月

「今年も新米できたから取りにおいで。」

祖母からの電話だ。母と取りに行くと、祖母は目尻にしわをいっぱい寄せた笑顔で十キロの米袋をわたしてくれた。

「ありがとう。」

と言うと、となりで見ていた祖父がにやりとする。これが毎年九月の風景だ。この米を炊くと甘い香りにつやつやした米粒。かみしめるとうまみが口中に広がる。ちよつと塩をふって作るおにぎりは最高だ。やっぱり祖父母が作る米はおいしい。

「じいちゃんの米は、みんなうまいって言ってくれるんだよ。みんなの米はじいちゃん達がつくるからいっぱい食べな。」

が祖父の口ぐせだ。私はこの米以外の米をあまり食べたことがないから、分らなかったが、外食で食べるご飯とはやっぱり何かちがう気がした。

私は小さい頃から米作りを手伝ってきた。種まきでは機械に苗箱をのせ、田植えでは苗箱運びや土ならし、稲刈りでは寄せ刈りといってコンバインで刈れないところを鎌で刈った。どの作業もとっても大変で疲れた。ある時祖母に米作りの大変なところを聞いてみた。すると祖母は、「一番大変なのは毎日の水の管理だよ。」

と答えたのだ。私はおどろいた。田植えや稲刈りではないからだ。理由をたずねると、

「毎日の管理でお米の味は決まるんだよ。おいしいお米を作るには毎日の世話をきちんとすることが大切なんだよ。」

と教えてくれた。だから祖母の作る米はおいしいのだと思った。毎日稲の様子を見て、暑い時には水を入れ、根を育てる時には水を少なくす

るなど、世話を欠かさず大切に育てたからこそ、うまみのつまったおいしいお米になるのだと初めて知った。

ある時祖父が自分の作った米のご飯がおいしくないとはいはじめた。祖母は炊き方も米も変えていないのにおかしいねと笑っていた。

祖父はその後検査入院した。検査の結果は末期ガンだった。ご飯の味が変わったのではなく、祖父の体は病によって、おいしさが感じられなくなっていたのだ。入院は九月。稲刈りの時期だ。祖父はベッドで家に帰りたいと言っていた。自分の体より稲刈りのことを心配しているのだ。医者と相談し一時帰宅した。歩けなかったはずの祖父が作業着に着替え、田を見て回りコンバインやもみすり機の調節をはじめたのだ。その顔は輝いていて余命三カ月とは思えなかった。

その後、稲刈りは終わり無事新米がとれた。祖父もその知らせを病床で聞き、ほっとした様子だった。

「じいちゃんの田んぼ、孫にやるよ。よろしくな。」

と面会で言った。そして十二月祖父は旅立ってしまった。ご飯を食べるたびに祖父を思い出す。もう祖父の米は食べられないと思うと悲しさが倍増する。祖父が作った最後の米を大切に味わって食べていた。

三月、祖母から米作りを続けることにしたと連絡があった。祖母の弟に手伝ってもらうことで、田んぼの面積は狭くなるが米作りができることになったのだ。私はもう祖父母の米は食べられないと思っていたので本当にうれしかった。もちろん米作りも手伝った。力仕事も頑張つてやった。そして九月、祖母が作った新米ができた。炊いてみるとやっぱりおいしい。祖母の米への思いと祖父の思い出がよみがえる。やっぱり自慢の米だ。

中学生になってお弁当の日が増えた。お弁当にはご飯が欠かせない。疲れがたまってもそのご飯を食べると元気がわく。祖父母の思いがつまったおいしいお米をこれからも大切にしていきたい。おじいちゃんこれからもおじいちゃんのお米みたいなおいしいお米が作れるようにみんな頑張るね。